

さわやかタイムカラ情報

一隅を照らす十島の教育

発行元 十島村教育委員会

〒892-0822 鹿児島市泉町13番13号 099-227-9771

E-mail toshima-ky@tokara.jp

十二月・・・心をたたける人

十島村教育長 原口 英典

この日夕刻帰宅すると、ともにつとめた若手教師が、実母の手作り椎茸だと言って採れたてを贈ってくれていた。

ふっくらと初椎茸の傘重し(綾子)

梱包された箱から出してみると、まさにこの句のごとく、厚みのある、かつ重みのあるふっくらとした傘付きの椎茸が、香り豊かに顔のぞかせる。中に手紙が添えられている。あの子、この子のことで、ともに語らい動いた日のことがよみがえってくる。厳と慈に満ち、常に子どもに寄り添う先生であった。生徒指導上難しい状況からも逃げることなく、その子に、また、あの子に真正面から向きあう先生であった。「たたく先生」はいけませんが、「心をたたける先生」であった。初冬の我が家の食卓に、この先生の熱い思いが、心のこもった収穫物の香りとともに広がった。

ところで、わたしの読書メモのあるページに次のような文言が書き写されている。それは、

“自然は、偉大であっても荒れ地しか作れない。田畑は、人間と自然がともに力を尽くし、協同することでしか実らない。自然に任せておけば、田畑は荒れ、家屋は壊れ、衣服は破れ、溝や堀は埋まり、堤防は崩れる。”と。

かの二宮尊徳は、荒れ地を觀ながら、無力感や絶望を覚えたのではなく、そこに人間の偉大さ、希望を感じ取っていったといわれる。

土手であれ、荒れ地であれ、そこは確実に種を育む力をもっている。人がそこに、「種を育む力を活かす工夫」というものを凝らしていくとすれば、荒れ地や土手も、人にとって希望の土地と化していくとも。

これから生き抜く目の前の子どもを、希望の土地としての未開拓の荒れ地だとしたとき、その子らは、確実に生き方の種を育む力を持っているのである。その力に、つまり、子どもの「荒れ地という希望を内在した心田」に、いかに耕しの思い<教育>という鋤(くわ)を入れるか、向き合う大人・保護者・教師としての希望も湧いてくる。「心たたける先生」は、「心田を耕す先生」でもあるのだ。

平凡を大切に生き去年今年(汀子)

【 としまファミリー劇場盛大に 】

小宝島でのファミリー劇場は、12月1日(土)に、ピアニスト伊地知元子さんとソプラノ歌手八木まゆみさん、バリトン歌手巻木春男さんを迎えて、小宝島分校特別活動教室において開催されました。



ピアノ伴奏による3人の「待ちぼうけ」「荒城の月」「この道」「歌劇」等ハイレベルの熱演に会場の34人の皆さんは、魅了されていました。特に、生の歌声に感激され、大好評でした。

夜は、先生方や地域の方々と懇親を深めることができました。

悪石島でのファミリー劇場も、12月15日(土)に、島唄者川畑さおりさんと合いの手籠田律子さんを迎えて、悪石島コミュニティーセンターにおいて開催されました。誰もが知っている島唄から、自身のオリジナルソングを熱唱され、49人の会場の皆さんは拍手喝采。



また、演奏の合間の子どもたち向けの指遊びに会場の全員が参加し、難しい動きに笑いもこぼれました。

最後の島唄では、会場のほとんどが踊り出し、大変盛り上がりしました。その後、忘年会にも招かれ、先生方や地域の方々と懇親を深めることができました。

【入賞おめでとうございます】

第8回アイテム写真コンテスト

特別賞 ・小林莉衣奈(小宝島中3年)

佳作 ・岩下 孟司(小宝島小2年)

第14回南九州市かわなべ青の俳句大会

特選 ・山元柊星(口之島小3年)

入選 ・永吉美悠(口之島小4年)

・岩下孟司(小宝島小2年)

・有馬 蓮(小宝島小3年)

平成24年度へき地・小規模校教育

優秀校 ・宝島小中学校

平成24年度グリーン日記コンテスト

最優秀校 ・平島小中学校

平成24年度学校環境緑化コンクール

優秀校 ・口之島小中学校

・中ノ島小中学校

【 絆 】 シリーズ 山海留学生として学ぶ

宝島での6か月を振り返って その2(11月号に続く)
立尾 陸 現在中3年生<熊本市>(宝島中2年生時)

～そして、宝島小中学校では、運動会や文化祭、一日遠足など、小学生と一緒に取り組む行事がたくさんありました。中学生の男子は、僕と誠省君と二人だったので、力仕事などいろいろ頼りにされました。

それから、僕が何より心に残っているのは、文化祭で三人劇に挑戦したことです。僕は、三つの役を瞬時に入れ替わり演じる重要な役割を任せられました。これまで劇で主役級の役はやったこともなく、不安でいっぱいでしたが、精一杯やりとげることができました。先生は、僕の良さを認めてくださり、いつも温かく根気強く声かけをしてくださいました。

教室から出るときには、「がんばって、行ってらっしゃい。」戻ってくるといつも話しかけてくださいます。正直これまでは、家で親と話すのも面倒くさいと思っていたから、こんな雰囲気には驚きましたが、慣れてくると、教室で伸び伸びと過ごせる時間が楽しかったです。

中学生は、三人だけの学級でしたが、毎学期のお楽しみレクリエーションもありました。これまで牧口優花さんと先生の二人でやっていたそうで、仲間が増えたという喜んでくれました。ここ宝島での生活は一生の思い出になると思います。

また、おこづかいがなく、お菓子が買えなくて困っていると話したら、先生は、売店で手に入る材料でできる簡単なケーキの作り方を教えてくださいました。出来たてはフワフワで、お店で売っているもの以上に美味しかったです。収穫祭のために作った黒砂糖ピーナツも、熊本で作ってあげると、すごく喜んでもらえるよと言われたので、冬休み帰ったときに友達に作ってあげたら、大喜びでした。僕はこれまで、お金を出して買うことしかできなかったけれど、宝島で学んだ手作りの良さを、熊本の友達にも教えてあげたいと思います。(続く)

【 子どもたちの作品 】 南日本新聞「若い目」

H<H24.10.19>より

前へ前へと

口之島中学校 3年生 大隈 翔太

僕が山海留学生として口之島に来て最後の運動会があった。僕の学校の運動会は、他の学校とは少し違う。小学校と中学校が併設していて、競技や応援団も一緒に行く。また、島民の方々も一体となって参加する、島全体の運動会だ。

その中で、僕は全体の指揮や赤組の団長を任せられた。僕たちは昼休みや放課後も毎日練習した。時には、疲労から休みたいという気持ちにもなった。その時は、みんな立てた「一致団結～最後まであきらめない～」というスローガンを思い出し、頑張った。

当日はあいにくの雨の中での運動会になった。雨が降れば、普通は運動会への士気が下がるが、誰一人、下がってなかった。最後の応援合戦は赤組も白組も雨が強く降りしきる中、雨の音に負けにくい大きな声を出して盛り上げた。

結果は競技の部で、僕たち赤組の優勝だった。これまでの3年間の中で一番の喜びで、思いっきりハチマキを

空高く投げた。この喜びはみんなのお蔭だ。僕はもともと指揮を執ることは苦手だが、後輩たちの手助けによって、最後まであきらめずに責任を果たすことができた。これから僕は受験という大きな壁にぶつかっていく。山海留学で培った強い精神力と、運動会で感じた最後まであきらめない気持ちを自信にして、前へ進んでいきたい。

【 子供のうた 】 南日本新聞「子供のうた」

<H24.11.23>より

楽しみ

飯田 陽菜

宝島小6年生

楽しみは

家族みんなと食卓で

テレビ見ながら笑い合う時

楽しみは

一人静かに本を読み

本の世界に入り込む時

楽しみは

糸をつるしてうきを見る

エサをつついた魚がいる時

楽しみは

軽トラに乗り風をうけ

島の自然を見て回る時

十島村の小・中学校からのメッセージ

悪石島小・中学校

教諭 奥田 義幸

教職について11年目、勤務校3校目で現在の悪石島小・中学校に赴任しました。今から約4年前、ちょうど十島村が皆既日食で話題になっていた時期でした。最初は小学校の授業や、中学校の専門教科以外の授業のことで不安もありましたが、逆に自分自身が研修することができるいい機会となりました。教科における小学校と中学校の系統性や、指導法の違いなどがわかり、今後の教員生活で役に立っていくと思います。少人数での学習は、生徒一人一人と向き合い、個に応じた指導を実践することができます。また、教員の数が少ない分、校務分掌や行事等の作業分担があり、これまで経験したことのないいろいろな校務について学ぶことができました。

生活面では、店が1軒もないということで、不安はありましたが、今はインターネットで必要なものはほぼ全て手に入ります。「急に必要だから買いに行く」ということはできませんが、その分いろいろなものを計画的に購入するようになりました。また、ここで生活して、今までどれだけ買わなくてもよい物を買っていたかがよくわかったような気がします。

地域での生活に関しては、最初はわからないことがたくさんありましたが、地域の方々がいると教わり、すぐ慣れることができました。悪石島に赴任したときまず驚いたのは、引越してした。島の方々が総出で出迎えて下さり、コンテナから荷物を出してあっという間に家まで運んで下さいました。人間関係が希薄だと言われる時代に、島での生活は人と人の繋がりや、人の温かさというものを肌で感じることができました。

教職員仲間である「あなた」へのメッセージ

本校に赴任して4年目になりますが、鹿児島県の教職員であるからこそ十島村に赴任することができ、よかったと思っています。そして、悪石島小・中学校で学んだこと、ここで生活したことはこれからの教師生活にとって、また自分の人生にとっても大きなプラスになると感じています。子どもがいるから学校があり、我々教員が必要であり、子どもがいるところへ行くんだということを思い起こさせてくれるところだと思います。多くの先生方が十島村への赴任を希望されることを願っています。